



独立行政法人 国立病院機構

四国こどもとおとなの 医療センター

アートプロジェクト

—今月のショット—



看護師長会の皆さん



2015年 8月号

—院内の小さな声から—

「バッグありがとうね。ボランティアさんに伝えてね。内ポケットもあるし使いやすいわ。これ、見て。どお？かっこええ？」師長さんはカバンを肩にかけてぺろっと舌をだしてポーズしてくれました。カバンは京都のモーネ工房さんが、病棟のリーダーである師長さんたちに、と、無償で作ってくださったものです。フレンチリネンの生地を裁断し、縫い合わせバッグを作り、そこに師長さんひとり一人が描いたオリジナルの鳥のイラストを、いろんな色でプリントしていただきました。白いミシン糸で描いた曲線は「風」をイメージしています。様々な鳥が飛んで軽やかな風が起るような病院でありますように。という祈りが込められています。

モーネ工房の井上さんは、「病院の中をこのバッグを持った看護師さんが行き交っている様子を想像するだけでもワクワクする」と話されます。看護師長さんたちは、丁寧に作られたカバンを見る度に、自分たちを応援してくれている人たちが病院の外にもいることを思い出してくれるかもしれません。ワクワクあったかい想いやりのかたちです。



—病院の痛み—

病院で仕事していると、時々廊下の隅で、のどの奥から絞り出すような声で電話しているご家族や、大きな目にいっぱい涙をためて病棟から走り出てくる看護師さんを見かけます。病院で痛みを抱えているのは患者さんだけじゃないのだと気づきます。付き添っている人、看護師、医師、皆それぞれ、胸に違った痛みを抱えています。パッチ・アダムス(医師でありながらクラウン(道化師)の格好をして世界中の孤児院や病院、難民キャンプを慰問し、苦しみの最中にいる人たちをユーモアと愛で包む活動をしている)は毎朝起きると世界中で毎日のように殺されている子どもたちの写真を見て、その悲しさと憤りに涙を流してからその日の仕事につくそうです。彼は自分が何の為にここにいるのか。という原点を忘れないように、毎朝そうして確かめているのかもしれません。病院は様々な痛みや悲しみが渦巻いている場所です。でも私たちは、だから病気になりたくない。病院には近寄りたくない。と避けるのではなく、だからこそ、病院にはどんな場所よりも多くの愛やユーモアや慰めが必要なのだと気づかなくてはなりません。どうしたら病院が優しい場所になるのか、皆で知恵を出し合って協力し合わなければならないのだと思います。その訳は、病気や災害は決して人ごとではなく、いつ自分たちの前に立ちはだかるかもしれない身近なものだからです。

治療が功を奏して、満面の笑みで退院する患者さんを見送る医師や看護師の誇らしげな姿を見ると、どんなに辛く悲しくても、この場所に留まり、闘病する患者さんをサポートする道を選んだ医療スタッフの気持ちがわかる気がします。人は1日のうちにわずか数秒でも、心が愛に満たされる瞬間があれば、明日に希望を持って強く立ち上がれるのかもしれません。

今月の一枚

作家名:テラサキユミ

心に残っている風景を見た時の気持ちを絵にあらわせたらと思います。雰囲気のある絵を描けるようになりたいです。